臥テ凍ヘ死ル者數ヲ不知、

〔後法興院關白記〕延德二年九月廿六日、晴陰夜來雨下、風吹自曉更雪降、積地一二寸、至巳刻雪降、終日時々雨下、九月雪、未曾有事也、　同廿七日、晴陰時々小雨下、石藏邊昨日大雪云々、六七寸積地云云、

〔閑窻自語〕六月寒事　寛政五年六月二日、土用中　北風ふきてひやゝかなる事、八九月のごとし、近來たえてきゝも及ばぬ事なり、三日ばかりにて風も吹きかはり、氣候もなほりぬ、のちにきく、北國には雪ふりて、うすくもつもれり、越後には三寸ばかりありけりとなん、

赤雪

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年正月己巳、陸奥國言、部下黑川郡以北十一郡、雨赤雪、平地二寸、

雪吹

〔書言字考節用集一乾坤〕降吹（フヾキ）　吹雪（同）

〔北越雪譜初編上〕雪吹（ふぶき）　雪吹は樹などに積りたる雪の、風に散亂するをいふ、其狀優美ものゆゑ、花のちるを是に比して、花雪吹といひて、古歌にもあまた見えたり、是東南寸雪の國の事也、北方丈雪の國、我が越後の雪深ところの雪吹は、雪中の暴風、雪を卷騰飈也、雪中第一の難義、これがために死する人年々也、

〔千載和歌集六冬〕うへのをのこども百首の歌奉りける時、雪の歌とてよませ給うける、

二條院御製

雪つもるみねにふゞきや渡るらんこしのみ空にまよふゑら雪

俊賴朝臣

〔夫木和歌抄十八雪〕山家冬夜

ひとりぬる宿はふゞきにうづもれていはのかけみちあとたえにけり

雪頽（ほふら）

〔運歩色葉集邪〕雪頽（ナダレ）　雪女（同）

〔北越雪譜初編上〕雪頽　山より雪の崩頽を、里言になだれといふ、又なでともいふ、按に、なだれは